大正九年二月十五日印刷發行　「みおやの光」第一卷第四號　大正八年十二月十八日（第三種郵便物認可）

第一卷第四号

みおやの光

○今日晨朝に佛の救世大悲の父を念せよ

佛教の通法として毎朝必ず六念を師す、六念の中先づ第一に佛の救世大悲の父を崇念せよと教られてある。佛を念すれば他の五念は其中に攝りておる。佛教信者は、今日一日はみおやの賜たる貴重の時間を空しく費さぬやうに、聖旨に契ふ務めを果すべきやうに深く心に徹くべき爲に朝起きて直に此の崇念をなせよとの御示もである。先づ朝起きたならば漱浴清淨にしてみおやの在まする處なりきが故に今現にこゝに在すことを一信じ。

恰も朝日の輝く如くのみおやの威神と慈悲との光明を以て今現に照さるゝ我身たるを信じて正坐而に在すみおやを敬禮し奉り即ち南無阿彌陀佛の尊き御名を稱えてアナタの御力と御惠みとに依りて活き働くことを得たる我等は都てを献げて仕奉らむ。願くはアナタの聖旨に契ふ務めを果さるゝやうに加被力を垂れ給へとの意を以て我は同朋衆と共に祈り上らむ。

此身は全くアナタの有と信じて一日動むる時は我等が我慢ものも光明の中に敬ふ處の念を以て己れを制裁する力となり聖旨に契ふ務めを爲し得らるゝなり。依て朝に祈るは、今日一日の慎しみを黙ふためである。

◎我等はみおやの容器

辨榮上人の說

○我等が師なる教のみおや

人間は宗教的の働きを爲す器である。工業場にて電氣や蒸氣にて運轉する機關や機械のやうに我等は如來の不可思議なる靈力に依て動かさるゝ器械である。吾人が如來の靈力にて愉快の運轉するやうに爲らんには例へば工業場の器械が巧妙に出來て缺點故障なく又之を操縱する技師が能く業に練達したる叡腦を揮つて器械を操縱する時は毫も澁滯なく快轉する。然る時は仕事の秩序も順調に技師も亦其業に興味を感じ身も心も其の仕事の中に沒投して途には時間の遲るも忘れ身體の疲勞をも感ざるやうになる。

宗教心も我等が此の身も心も凡ては實には彌陀の靈力に運轉せらるゝ器具である、故に全く此の身と心とはもと法身から受けたので有から身も心も實に巧妙に出來て居る、而して四肢五官及び總ての身體の器械、亦血管循環や呼吸や桑蠶機圓などの生理的の調節機關が能く調順にして宜しきを得れば自然に如來の靈的電氣に感じて快轉す。此の身も心も彌陀如來の電氣に依て靈き働きを爲すべき器械たると又機關とである。扨此の如來の器たる身心を精練し、機關の操縱法を能く練修する時は意の如くに快轉し、聖旨に契ふ働きを爲すに應分に自由となる。

教祖は自ら如來の器たる御身心を能く研きて我等のために好模範を御示しなされた。去れば我等の身軀各部の五官より筋骨に至るまでいかなる處にても如來の光明に依りて清められ、又恩寵に充たされて自由に快轉するやうにすべきである。縱令精神と志氣とがいかに猛威なるも身體機關の調練宜しきを得ざれば魚の如くに自己の身體を運轉さすることが出來ぬ、故に此の身器の精練を忽緒にしてはならぬ。

○身心の靈化

若し人が信仰に入る時は此の心が如來の光明に靈化せられて麗しく生れ更るばかりでなく此の身體各部も同じく如來の光明に充さる時は玲瓏と輝き快く運轉するやうになるべき器なれば必ず調練をしなくてはならぬ。人は宗教的に使用せらるゝ程高等なる靈妙なる身心なれば他の動物とは大に異って居る、動物は馬は馬、牛は牛の本能のまゝで自分の性質のまゝに活きて居つて宜いので調練の必要はない。人は高等に進化した丈に磨かなければならぬ、礦物に例して云はゞ岩石などは人工的に琢磨するの必要はない天然のまゝにて返て素朴なる處に風韻あつて宜いのである、然るに高等なる寶石や水晶抔は人工的に琢磨しなくては其に具

有て居る光りが放つやうに爲らぬ、人間は高等に進だ丈に充分に信心の叡練し即ち能く如來の光明に靈化せられざれば如來の靈力を以て快轉することが出來ぬ是れ信心の精練を要する所以である。

○教祖の精練

釋尊は御生れつき三十二相の備り完全無缺の形體にて在ます、然してなを身體各部に亙り腦髓神經より筋骨皮肉凡てに於て充分に精練鍛治し給ひて實に彌陀の靈光に充されし靈器に在した。

就て何人も思ふならん、釋尊は精神には實に大悟徹底して不可思議の力を以て如何なる惡魔外道をも降伏し給ふならんも御身體は本、王宮にありて數多の侍女にかしづかれたる玉體なれば體力としては迚も寒熱等の自然の刺激に對しては抵抗する程の皮膚筋力等は持ち給はざりしならんと、否らず佛陀は王宮を出て山に入ての苦行はいかなるものも及ばざる體練の行を敢行なされたる結果として風雨寒熱にも亦いかなる事も能く耐得らるゝ體力を有し給ふた。

然らば今、念佛者が教祖の如くに光明中の人となりて如來の靈力を現すべき器たる身心となるには山に入りて修行せねばならぬ哉と云ふに然らず、只教祖は斯の光明を發見せんが爲に長年を要して御修行なされた。なれども我等は現に智愚賢不肖の別なく只、教祖の教を仰信し一心に念佛して至心不斷にして而して念々彌陀の光明を攝取せらるゝことを信じて心々相續して止まざれば寒も呼吸も悉く光明に靈化せられ靈光に薰染して四百兆の細胞迄も悉く光明中のものとなる、身も心も悉く是れ如來の有である、此の四支五官凡ての機體も乃至全身を循環する血液も呼吸の息も凡ての分泌物までも彌陀の靈光に浴して此の器械が愉快に運轉するやうに成り得らる。若し全く如來の聖意を會得して我は如來の子である、親と子との間に温き血に通つて居る、教祖は我等に此の身も心も彌陀のものとして献げて使ふべき御模範を示しなされた

○光明生活の階級

天に在ては彌陀地上に出ては釋迦、大小異りと雖、因體の異方現に在す、大宗教家としての釋尊は彌陀の光明を人格的に現じなされて一切の衆生に模範を示しなされた、我等は之れに則りて光明獲得せんが爲に一心に念佛する時は頓て光明の人となり得らる。若し然らば其光明を獲得し光明の生活と爲らんには初心より直に圓滿にして教祖の如くに成得さるゝものなるか將た、階級的に進歩するものなるかと問はゞ斯の信仰の生活には階級なくてはならぬ、其の光明獲得の順序は恰も月の盈缺の如くに喩らるゝ、現世界に於て全く圓滿なる佛陀のみ滿月にて文殊彌勒等は十四日の夜の月、各宗の祖師の如きは十二三夜の月にて初めて信仰の光明を獲得した人は、初めて現たる三日月の如くである。又毫も光明獲得せざる人は晦日に喩らる。又縱令念佛すと雖も光明獲得せざるものは黒月に喩ふべきである。又いかに佛教を廣く學び辨才無碍なるも如來の光明獲得せざる人は人生が闇路を辿つて居る盲目生活である。

何人も人と生れたる上は如來の光明を得て生を靈覺すべきである。而して光明の中に向上の一路を辿りて歩々に進むこと月の纖月より一夜々に滿月に進むやうに、信仰の生活に入るべきものも初めて如來の子たる自覺する時の人生が價値ある意義ある生活に入りたるのである。教祖釋尊の教化の目的は總ての人々をして斯の光明を獲得して光明の生活に入るべき眞理を教へ給ふのである。

○諸根悅豫

諸根悅豫、先に演ぶ如く釋尊の諸根（眼耳鼻舌身）凡ての機能が能く調順して凡ての機體が完全無缺なるのみでなく御身體中の各部が能く調練し、實に彌陀の靈德を安置すべき聖殿にて在ます。釋尊は自ら五根等の凡ての生理機能を能く調伏して在ませば動轉輕躁の擧動等は毫も爲し給はず。去れば釋尊の行住坐臥にも威儀尊嚴にして六根寂靜に在ましていかにも端嚴なる靈儀を瞑む時は何人も眞に畏敬感服せざるものはない

去れば世尊、成道し給ひて後、牟尼鄰陀龍王の池に向ひ給ふ道に於て一の道士に迎なされた優波伽と云ふ、世尊の相好及び六根の寂靜に在まして威儀端嚴なるを瞻て奇特の想を爲し頌して云く、世間諸々の衆生は皆三毒の爲に縛せらる故に諸根輕躁にして外境に馳蕩す然るに今仁者を見上まつるに諸根極めて寂靜なり、必ず解脫地に到り給ふこと決定して疑なし、仁者其姓は何等と」是釋尊の諸根が寂靜にして威儀の最と尊嚴き方面である。

斯の如きの形式の中に最も豐富なる靈妙なる調和なる快活なる內容は即ち如來の慈悲の光明の充實である。此の內容の最も圓滿なるは彌陀三昧の實質である。大自在の四德莊嚴と自受法樂に滿ち給ふ釋尊の身體諸根の凡てに亙り能く調伏澄清神鑒なる明鏡の影の表裏に暢る如くに彌陀の三昧重々無盡不可說の內容の歡喜妙樂の靈感が悅びに滿たされてある故に神は蓮華藏世界に安住し給ふ。無盡の法樂を受けて在ます、故に凡夫の心が常に五塵の境、見るにつけ聞くにつけて心が馳

蕩して輕躁動轉し妄想の波浪止まざれば靈境現じ難きが如きと同じからず。

我等が生れたまゝの五根及び凡てがゆつくりと沈靜して居らぬのは只、目や耳の色や聲にのみ心が奪はれて其の內面にじつと心を落ち着けない爲である、然るに我等は教祖の御教に本づき凡てを如來に献げて其の溫かな如來の慈悲の惠に入る時は何時しか其光明に融合して身も心も總てが第一に我と云ふものが如來の中に融け合ふて無我の本體となり如來中の我となつて始めて諸根悅豫の心理狀態となる。

五　戒

(一)殺すこと勿れ、汝が靈格を

(二)偸むこと勿れ、努力の光陰を

(三)姪する勿れ、天魔の使ど

(四)醉ふこと勿れ、肉と我とに

(五)欺く勿れ、己が良心を

汝が身心は肉と我との慾を貪らんが爲の器にあらず、靈我の理想を實現せんが爲に與られたるの具なり。

佛典物語

ウテン王の正后

佛陀禪那

クエンミ國主を優塡と名く拘留國に摩因提と云ふ長者に一うの女あり、其女の端正華色世に比なし、去れば官僚や豪姓抔が八方より聘を求むるもの多かりき。父の思ふに世に君子ありて其の容貌の美、吾女と匹偖するものあらば娶はさんと、廣き世の中に適當する男子なかりき、偶々長者が釋尊の三十二相好聞滿、身色金光威儀無上なるを瞻て心竊に喜んで云ふ、吾女に對して云ふ、相當する正に斯の人であると、家に歸りて其妻に語て云ふ、吾今世に比なき聖を見出したり、速に女を化粧し裝飾して當に連れ行かんと、夫妻共に容飾を嚴かにして其女を伴ひ徐かに歩めば瑤珞の光り邊りを照し其の姿色の美麗なること實に見るものをして心を動かさしむ、夫婦女と共に佛の御許に至る途にして彼の妻は佛の御足跡の金紋を見て驚て云く是れ世の凡人にあらず淸淨なること斯の如きの聖者は定めし婬欲な

からん、然らば必ず女を娶らず還つて辱しめを受るかと、夫の云く其は何故に然るや、妻の云く婬人は穢を塊て行く臭るものは指を歛めて歩む、愚者は足地を踏む、斯の跡は天人尊の足跡なり。

長者の曰く其は汝が如き婦人の知る處ではない、汝樂まずば自ら獨り家に還れよと、自ら女を貝して佛の御許に詣で、稽首して佛に白す、仁者よ勤勞教授して自ら供養するものなし、此の蘊女を献ぐるに依て願くは掃拭の勞に給し上らんと、佛の曰く汝は其女を以て研美と思ふか答て曰く此女の顏容の美なる世間に雙びなし去れば諸の國主豪姓貴族爭ふて求むるもの甚だ多し然れども皆應せざりき、こゝに仁者の光顏の巍々たる實に世に比類なく始めて女の配偶に能く匹を得たれば献げたく思ふのみ、視給へ此女頭より足に至るまで好からざる所なしと申ければ佛の曰く惑へる哉汝は肉眼にて只、皮膚のみを見て自から好色と思へり、我今道眼を以て之を見れば頭より足に至るまで一も好きものなし、能く見よ頭の髮は但毛である、象馬の尾も亦毛

たり、常に正法を以て世を治め大王を輔けて政を正しくす、去れば宮中の採女に至るまで正法律を以て宮中の則とす、斯の如きの正風の光り後宮に照す時即ち四鏡妖魔の醜正面を照す、彼の妖婦の爲に何に正后の正一行が煙かりしかは察するに難からず、彼の妖婦の好管にたけたるに大王の情にもろき、妖婦のために捕はれとなつていかなる事にも彼女の意を迎て居る、去れば妖婦は後宮の中の奸惡の婆連と謀りて正後を中傷して宮中を退かしめんとした、即ち謊りて王に讒言して曰く正后は佛を信ずる意なし佛弟子の戒若き美僧と通じて其機會を造るために信仰を裝ひ佛及び弟子等を請じ入れて相値んと欲するなりと、斯の如き奸邪の讒誹は遂に大王の激怒を招き、大王曰く正后の罪惡は天地の間に容る、所なし之に刑罰を加えて懲さんと先王々祖の法あり若し正后にして奸淫の罪を犯す時は祖先の定たる法に依て自ら弓を取て射殺すと、王の嚴命は淸淨皎潔なる雪よりも潔き正后の許に下れり、后は之を拜するや一時は驚怖したるも忽ちに意を本に復し

である、髮の下の髑骨は屠家の猪頭の骨と異ることなし、偖、不淨の相を悉く說て聞かしめ斯の如き體を解剖すれば節々の相離れ首足狼籍である、何れの處が好しと思ふや。

昔吾菩提樹下に在りし時、大六魔天の三女が顏貌華飾きこと天中に無比にして迚も汝が女等の倫にあらず、彼女共が我が道心を壞らんと欲し、所有誘惑の手段を取りたるも我は其の身中の穢惡を說けば忽ち彼等は皆變化して老婆となり形ち壞れて本に復せず悲泣し慚愧して去りぬ、今汝、此の穢垢の身を以て吾に强ゆ何の狂言ぞや急に將いて還り去られよと呵責を受けて慚愧に勝ざりし。佛よ若し大仁にして娶り給はずば我は優塡王に妻せんと欲するも可ならん哉と、佛何とも答給はざりし。

長者は即ち女を送りて優塡王に供提せり、王は凡俗である、此女を得て大に悅び父を拜して大傅となし女の爲に新宮を興し妓樂千人を以て常に給侍せしめぬ。王の正大后は曾て佛世尊に歸依し師事して須陀洹を得て謂びらく斯の如き罪是れ宿緣の然らしむる處誰をか怨まん姜が命は且暮に迫れり但徒らに恨怨の念を以て此の貴重の時間を失ふべき時にあらず、如し一心に念佛して刹那々々に如來の光明に三昧現前して如來の慈眼を拜し慈悲の御胸を仰ぎて聖きに生れんと、其夜は終夜念佛三昧を以て時間の遲るを知らざりし、翌日は庭前の樹下は繩綾の身を以て曳き出さる、時に端座瞑目して一心に佛の慈悲を念ず時に大王は憤懣以て絕頂に達す、大弓を採て矢を番ひ已れ憎むべき逆罪人と呼び狂へる獅子王の如く后は苦し眼を開きて見たならば昔は正しく妹負の間、偖老同穴の契り深き夫の君今は妖婦の爲に魂を奪はれて正見の眼盲みたる痴漢たり、滿月の如くに弓を引絞りて我を害せんとする姿なれば、去れど信仰深き后は毫も他の念なし、但瞑目して專ら念佛三昧に入り心々念佛し念々慈悲を想ひて願くは如來よ我が大王の罪を赦し給ひ必ず當來は淨土に生じて爾び相見ゆるやうにと念じける。

今は正しく三昧現前し彌陀慈父面前に表る、心歡喜せ

るが故に無生忍を得たり。

奇なる哉大王の射る處の矢は百箭共に后を繞つて王の前に止まる箭の盡たる時に王は始めて覺醒し給へり。正氣に爲りて甚だ其非を悔ひ恨然として懼れ、ア丶我れ誤れり我罪甚だ重し、卿は眞に是れ正しき人なり、若し卿實に罪あらば一矢以て命を隕すべし百箭悉く當らず實に卿は天意に稱ふものなり、我は奸邪の讒誹を信じて惑ふて こゝに至ると自ら正后の手を取て后を扶けて手を携て宮に入り深く其非を悔て慚愧して曰く吾恐てり自ら王位に立て一國の人民を掌る心の聞きこと是の如き、無辜の人を殺すこと甚だ多かりしならん卿は實に大丈夫なり斯る時に臨んで泰然として怖れず自若として動せず吾は實に慚愧に堪ずと謝しけるに后は自ら讒下して曰く妾に本より纖弱き女性斯る場合に臨で動せざる如き心情は自己の力にあらず即ち是れ釋尊の教に依て如來の慈悲を被れば なり、若し妾にして彌陀の慈悲を離れなば必ず女性の弱點なる嫉妬憤恨、大王の箭の下に今は死しても此の怨みを忘れじと魔の鬼と爲て中有に迷へしこと必せり。

若し大王よ願じ給ふことあらば今より佛世尊の御許に詣でゝ法要を聞き奉らんとの后の勸めに依りて大王は即ち金車白象に駕して佛の御許に詣で廣く正法を聽聞し夫より大王は深く佛法に歸し終身佛に事まつりて正法を以て國を治め給へりと。

清き友よ親しく釋尊の教化を享け正しくみおやの光明に活ける女性の如何に力強きことよ、去ればこそ彼の慈悲三昧の身には矢も得通らずして皆身を遂りて王の許に還りしと。請ふ此の說に倣へて縱令罵詈讒謗の矢を以て射られても一心に彌陀の慈悲を念じて止まざる時は箭筈の爲めに自己の德性を傷けずして還つて德器を練るの機とならん、必ず正后の慈悲竟に夫の王をして改善せしめたる如くに對者を感化するに難からず。

實に正后の如きは光明生活の好模範にあらずや。嗚呼實に謝すべき哉、彌陀の慈悲、報ずべき哉、釋尊の恩。

◎法藏比丘

筑前坊

神話の法藏——本有の彌陀と正覺の彌陀——地救上の法藏と正覺彌陀——小法藏比丘

極樂淨土が法藏比丘の發願修行に依て建設せられたと云ふことは敎祖釋尊の金口に出づと雖も今日の多くの人には首肯し難い事である。思ふに敎主の說法は隨類應導で以て直に法に依て眞實に入り能ざるものには譬喩因緣を以て導かれた、彌陀の因位法藏比丘の因緣は機の爲に大悲善巧方便としての神話と見るべきならん。我國の神話として伊弉諾伊弉冊の尊が海水で目を洗つて會見せられた時日輪が生れたと云ふやうな話がある が今日一般には容易に信ずる事は出來まい、然し出生の因緣の如何は兎も角として現に日輪の存在することは事實であつて誰も疑ふものはない、吾人は法藏比丘に依て淨土が建設されたと云ふ事は直に信ずることは出來ぬが本有常住の彌陀及び淨土の實在を信ずることは猶し日輪の存在を疑はざるが如し、然らば經說の法藏比丘を全く一種の神話として意義なきものとするかと云ふに其は善巧方便としての價値の外更に法藏比丘は本有常住の靈界と人類世界との通路を開き給ひし大靈の權化なりと思ふ。換言すれば法藏比丘は人類世界に於て最先第一に靈界を發見し本有の彌陀と合一して其の尊き無上道を人類に紹介し給ふた第一人者である日輪實在して世界は光明土なるも人類凡てが盲目であれば世は闇である、法藏比丘は闇黑の人類精神界中の最先覺者としての第一の靈光なる目明きである。

更に云へば法藏比丘は最先第一の應身佛であり報身佛である。應身佛には發願修行と正覺敎化がある。報身佛とは因位の發願修行に酬ふて本有常住の彌陀が顯現して彼此無對の果位を得たので即ち正覺の彌陀である。法藏比丘は無始の始に上界より降り給ひし應身佛にして又、無始の始に本有の彌陀と合一し給ひし正覺の彌陀である、

本有法身阿彌陀尊　迹を十劫に垂れしまゝ

質疑應答

○道友某工學士の質疑に答ふ

山崎辨榮

一、永遠の生命の意義に就て

イロハの三義、何れも[illegible]論として[illegible]あり、斯の意を宗教[illegible]識の上に[illegible]信し、精神生活に於て實現せんことを要す。佛敎に謂ゆる永生の意義を明さん。佛敎の終局目的とする所は永遠の生命である、即ち生死を解脫して得る所の涅槃である。涅槃とは生死を超越したる永遠の生命、常住の平和の意義である涅槃の體は宇宙絕對の本體、無始無終の靈體である一切衆生の生命は此の本體を根底として分身したる個性である。然るに個體のみを我れと執して根底たる自己の全體性を覺せざるを迷の衆生とす。即ち小我を執する惑を本とし業を造り、業に善惡あり、業の因に依りて六道生死の苦を受く。生死の本たる小我は惑と業より造りたる迷妄にて無實の性である惑を解き業を脫して小我を滅亡して眞空無我の眞如の顯れたる涅槃を得るを目的とする、之れ小乘の聖者羅漢證得の果である。

肉體を有し乍ら無我眞如を證して永遠の生命を得たるを有餘涅槃とす。此の間は神は永生の平和を得れども肉體自然の束縛は免れぬ。而して此の肉體の繫縛を脫したる時は眞實の永恆涅槃に入る、之を無餘涅槃の境地に於ける法藏比丘であつて正覺敎化の本迹不二なる靈體の　無量壽王に歸命せん

本有の彌陀も淨土の實現も應身の正覺として果位の報身顯現せずば人類世界には永劫靈界は不明である。此の點よりして法藏比丘に五劫思惟兆載多劫の修行と云ふことも無始の始より宇宙に充ち滿つる大慈悲の遺瀉なき救ひの親心が發動せれたるものとして痛切に無有く感ずるのである。

コロンブスが亞米利加を發見したと云ふことは土まで持て行た譯ではないがコロンブスに依て始めて新天地に入るの道が開かれた。法藏比丘十劫正覺の因緣は彌陀の願力に於ける久遠劫來の人類救濟の歷史を意味する。

嗚呼吾等は心の闇に彷徨して本有の御親をも知らず、歸るべき聖き聖國をも知らずして哀れ捨落の底に朽ち果つべかりしに法藏の正覺に依て攝化十方の門戶は開かれぬ、嗚呼尊い哉悅ばしい哉。

仰ぎ惟みるに敎主釋尊が地上に出まして勤苦六年の修行は此の地球上に於ける法藏比丘であつて正覺敎化の五十年は即ち地球上の正覺彌陀である。敎主が恒河の邊り菩提樹の下に於て合一し給ひし彌陀も十劫已前に法藏の合一し給ひし彌陀も同一實在なる本有の彌陀である。されば五十年敎化の人佛釋尊は滅し給ふも本有常住の彌陀即ち正覺に依て合一し給ひて無量壽なる眞實の釋尊は永却の生命である。

如斯本有實在の彌陀よりに應身法藏と下りては正覺報身の門扉を開きて攝化衆生の慈光を垂れ給ふ。實に法藏と雖も一法藏にあらずして久遠劫來大慈悲の姿を地上に現して番々幾多の法藏となつて生死の子等を救はせ給ふなり。されば敎主は壽量品に、我佛を得てより來た經る所の諸（の劫數無量百千萬億載阿僧祇常に說法して無數億の衆生を敎化して佛道に入らしむ、然しようこのかた無量劫衆生を度せんが爲の故に方便して涅槃を現す、而も實には滅度せず常に此に住して說法す』と說かれた。敎主の本地實在の彌陀は今現は世に在して說法し給へども吾等の多くは聞くを得ず壽量品に『凡夫顚倒の爲に實に在れども而も滅すと云ふ』

涅槃とす、之れ小乘の永遠生命を得たるものとす。大乘の永生涅槃は之と越きを異にす、小乘の終局は眞空眞如の涅槃を證して個性なる小我を滅し生死を越ゆるを永遠平和の究極とす。大乘には小乘の究極結果の涅槃を自性の本體として其の根底の上に個性を亡さずして個性を以て全體の顯現として凡夫の如くに小我に執せずして大我の個體として大我なる涅槃の有ゆる恆砂の功德の開顯し大我の生命を自性の生命として一切衆生は元、同一の自性なれば一切の衆生を度し一切の煩惱を斷じ一切の眞理を覺知し、個性の功德を以て全體を滿たしめ高德圓かに滿ちて常樂我淨の四德莊嚴の涅槃界に在て常恆に生死海の衆生を度し究ひるに至る、之を永遠の生命とす。

今光、叩主義の永生は我等一切衆生は絶對なる大みおやより分れたる個體である、然るに個體我の根底なる大みおやを信知せずして朦々として六道生死の身を受くるを迷とす。我等大みおやを信じて、みおやの慈悲と智慧との光明に孵化せられて心靈の復活しみおやの子たることを信知したる時に永遠の生命を信ず、而して此の生命は全くみおやの賜ものなれば盛意に體現するやうに全力を竭して努力す。此に至れば身は娑婆に在り乍ら神は大光明中に在りて無上の光榮と無比の靈福を感じらる。然れども身には寒熱及び飢渴の束縛は免れず、此れが爲には肉體は肉を養ふためには應分の努力すべきである、然し肉體の命終る時には、みおやの許に還りてみおや及び一切の同胞と共に涅槃常樂を享受す。此を永遠生命の意義とす。

理論的に生命の意義は哲學としての價値ありとするも實際の精神生活には價値なし、依て今は宗教意識の上に永生を自覺し永遠の光明の中に生活するを目的とす。

二、生死解脫の意義に就て

佛教の内に解脫主義と救濟主義と光明攝化との三主義あり。

初めの解脫主義は大小乘に互りて衆生には消極的に脫却すべき惑業苦の惡素質あり。積極的には開發すべき靈的性能あり、惡質は例へば鏡垢の如く鏡垢を除き去りて珠玉の光輝を發するが如くに、衆生の惑業を除き去る爲に戒定慧の三學を修して靈的自覺の光明を開發し覺了と實行の究極を得道す。之れ衆生本具の靈性を開發して煩惱の惡質を解脫するの主義なり。大小の聖道門此れに屬す。

次に、救濟主義——衆生は全く無明罪惡の凡夫、自ら解脫の因なく唯、絶對的大救主の救を仰ぐ外に道なし、唯衆生は無知無力にして自己の力の及ぶ處にあらず絶對的に歸命信賴する時は必ず永遠の救を得るものと信じて救濟せられたる上には如何に爲し給ふも自己の意を容るべきにあらず、何んとなれば本より地獄一定の惡人が如來の本願に助けらるゝものなれば唯、地獄の苦を免かれ如來の助けを蒙むることなれば唯、如來に一任すべきのみ、自餘は只あなたの準繩に順ふ外なしと確信す。之を救濟主義とす

光明攝化主義

斯の主義は前の兩者を合したる如く、一切衆生は本大みおやより受たる靈性と人間より受たる煩惱との兩性を具して居る、故に靈性は具有すれども產みたての卵のやうなものにて孵化せざれば活用せぬ、故に只、人の子としては無明と罪惡と汚れと苦惱とである、苦し未だ靈性を開き煩惱を靈化するにあらざれば永遠に闇黑生死の苦を脫することを能ず。此の生死の苦を脫して永遠の常樂と圓滿なる人格とに爲らんには、みおやの光明に攝化せらるゝの外に道なし。衆生は大みおやを信樂して一心に念佛する時はみおやの光明に攝化せられて靈性の開くを信心開發すと云ふ。罪惡と及び苦惱は解脫し靈化す、經に「三垢消滅身意柔輭」と明し給ふ、然して光明攝得する時は體現的に生活し而して後、命終ればみおやの許に至りて永恆の靈福と共に靈的に活動することを期す。

己上の三義あることを御了承なされたならば解脫と救濟の意が御解りになることならんと存じらる。

尙再在質問の文に就ては次號に明さむ。

◎祈りの人

奥村辨誠

我は常に祈りの人でありたい、我はわが全身を傾けつくして神に縋り賴る強き信仰心の外何物をも持たない。嘘、我は繫がれたり、脅き戒律も奇しき哲學も科學も、今は一として我を救ふに由なし只だ我は神を信ずることにのみ因つて救はるることを得るは何等の光榮ぞや。

我は理性の鍵を以て神の扉を開かうとはしない、慈父を戀念する聲によつて端的に佛を拜したい。

雜報欄

○九州の三昧會

筑紫、若松市安養寺に於ては昨秋十月三十日より十一月四日まで念佛三昧會を修せられた、會員は十三名であつたが孰れも熱心で殊に男子數名は其心組念として其後引續き毎朝五時より六時過まで約一時間中乃至二時間安養寺に於て念佛勤修されつゝあり。蹟る眞面目な信徒に依て、却て地方遠俗の惰慢な風を改められつゝある。近來北九州に於ては御教授に依て夫がホントカに明になつて來た。ために何となく興味が出て、心の底まで悅びに充ちて仕事にあたることが出來たのである。第一學期までは人さし行くべき道について未だ完全な眼になつて居なかつた。斯く心が固まつて居ない爲に知らずに惡い事をした事もあつた、然るに第二學期になつて、其の光明に漸く辿りつくまで出來た。そして性身上の眼が固まつて來た、其の後もいよいよ眼が固めて如何なる事に遭偶しても動かない程に修養したいと心掛けて居る。（白下暗子）

謹告

○九州の讀者諸士へ

各地幾多の熱心なる僧俗道友の切なる御求めに應じ昨秋十一月より山崎上人執筆の月刊雜誌「みおやの光」を極戸教會所より發行することゝなりました、就ては九州各地へも此所彼所と一部若くは數部宛御送り致しました何れ卒數部御受取になりました方は檀信徒若しくは道友の方々へ御頒ちを願ます、尙ほ御手數恐入りますが讀者の統一上引續き御愛讀下さる方は部數と住所姓名を一々「筑前筱手郡新入村長安寺」宛御申込ください、本年五六月より本紙も多少體裁を改め大に發展をも大分光明國の組織が出來てゐるから、會員名等は其の時期を待つて發表せらるゝならん。願くば、速に全國光明國の綿密運動を開始せられたきものなり。（坊）

人生の危期たる青春時代、哀れ闇黑の底に沈まんとする時に、貧村樂雷寺の住持僧に救はれて、母さん如來の御光りに浴することを得たる私、遂には信州國訪町なへ距る約二里の片山里に住むものであります。毎月搗き餅、嫁入食が催されて道友相寄び誦經念佛の聲に因る法悅の涙を催します。折々は高僧碩德を請して聽き、有き御教を聞き信仰の增進に努めさせて頂て居ます。之を云ふも之は宮澤民音上人の五重の結緣に近くは御上人の御化導に依ること深く感謝いたします。

懇しい同じ教の友、垣の側り に咲するは深山の花と尊ぶよりも床しき感に打たれます、あはれ各地の道友、諸兄、姉よ同じ教の道ゑ辿りて共にみおやの光りに浴し濟く樂しき月日を送るやうに敎へ導き給へかし。

（樂雷寺揚德婦人會一員仲藤げん）

第二學期の修身報告書

光明學院第一學年　奥野既輝

自分はまだ學園に入學しない以前にも此の天地宇宙の大生靈即ち大御親のあることは、多少は聞にあつた。然るに學園に入學して已來、兎角の御教授に依て夫がホントカに明になつて來た。ために何となく興味が出て、心の底まで悅びに充ちて仕事にあたることが出來たのである。第一學期までは人さし行くべき道について未だ完全な眼になつて居なかつた。斯く心が固まつて居ない爲に知らずに惡い事をした事もあつた、然るに第二學期になつて、其の光明に漸く辿りつくまで出來た。そして性身上の眼が固まつて來た、其の後もいよいよ眼が固めて如何なる事に遭偶しても動かない程に修養したいと心掛けて居る。（白下暗子）

計る考であります。若し本年四月までに引續き購讀の御申越しなき時は自然發送を御遠慮致すことあるべく御承知置き願ひます。（發送部）

○誌料　一ヶ年前金五錢　郵稅五厘
一部前金郵稅共金六拾錢
○廣告料　五號活字廿四字詰一行前金五拾錢
半頁金九圓　一頁金拾圓（前納ノ事）

大正八年十一月十五日印刷　（毎月一回發行）
大正八年十一月十五日發行

編輯兼發行人　中村禪定
東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

印刷所　秋塲熊太郎
千葉縣東葛飾郡松戸町二丁目

發行所　光明會松戸敎會所
振替東京四九三四八番

大正九年三月十五日印刷　大正八年十二月十八日　犬種郵便物認可

光の子

第壹卷　第五號

佛の救世大慈の父を念ず

大慈悲なるミオヤよ、あなたが法身の德を以て天地萬物の設備にて我等を育くみ給ふ所以は更に報身の智慧と慈悲との光明を以て我等衆生の心靈を養ひ之を聖意に稱ふる子の德を顯はし、現在を通じて永恆の常樂に攝取せんが爲なりと信ず。

我等はあなたの本願に順じて至心に信樂してミオヤの光明中に復活せんと欲して蓋はしき聖名を稱えて念じ奉る時は、ミオヤは子を愛し給ふ大慈悲を以て我が心靈を育み給ふ。本より罪惡深重の我れがミオヤを至心に信樂して消められたることは全く恩寵の光に依ればなり。願ふに世の同胞の中に未だミオヤを信知せざるものは闇き胸の中に諸の惡魔のために襲はれて現在より未來まで闇憺たる獄に墮ちて苦を受け罪を造ること窮まりなし。大慈悲の父よ、冤る人々をば殊に憐みを垂れて、光明の中に攝取して靈化し給へ。已に消められたる人々は益々信念增進して大道を進趨するやうに未だ入信せざる人々は光明を被ひりて信芽崩發して清き生命と爲りて御子の德の顯さるゝやうに恩寵を垂れ給へ。

◎我等が師なる教のミオヤ

辨榮上人の說

○姿色清淨

敎祖釋尊の金色の上に御血色のいと清らかに在せしは血液循環や呼吸及び發聲等の神經及び分泌液等の調節作用が能く調練し節の宜しきを得給へばなり。故に內的生活も調節が適和する。故に其が表現して姿色清淨皎潔である。

抑も血色及び氣色を能く調ひんには氣海丹田に氣を養ひ靈氣に滿ち邪氣去り、神氣玲瓏玉の如くなるべきである卽ち、佛陀の金色の靈色が常に身體を養ひ血液の循環調和にして四大常に輕安に金色の靈色は外塵の爲に酸化して銹を生ぜず、宇宙の最靈英氣たる彌陀の心光に養はれて在ます釋尊の御容色の金色なるは何故なるか、黃金と云ふものは外氣の爲に酸化して銹を生ずることなく何時も變色せぬものである、釋尊の御精神の內容の本質が純粹眞靈にして彌陀の慈悲に充されつゝ在すのは凡夫の心が煩惱を以て胸に充ち外塵の目に色を視、耳に聲を聞き抔の眼の欲耳の欲等の爲にひかれて外境の爲に染汚されて、凡夫の心は恰も鍍類其他の金屬のやうに銹を生じて變色するものと同一でない、卽ち外から惡口罵詈に遇ば忽ち憤怒して色に現れ又、紅顏紛黛の麗しきに値ひば惑ひ易く、內に貪瞋の念が生ずれば忽ちに其の喜怒哀樂が外容に現はる或は憤怒胸に充れば忽に赤鬼の如く赫として焰を燃し、恐怖に打たれては忽ち顏色蒼白として青鬼の如くに變ず縁に觸れ境に對して內心に起れば卽ち容色に變化するが凡夫の常である。

然るに如來の靈應に充されたる敎祖は決して然ることはない。何なる境遇にも御胸の內が動せぬ故に御容色にも變化はない。凡夫の喜怒哀樂が忽ちに姿色に現ると釋尊のいかなる境遇にも金色の燦爛たる御容色が清らかにして何時も變じ給はぬのは御胸の內容が異る所以である。

世尊或時提婆達多が阿闍世太子と謀りて世尊及び諸弟子等を害せんと欲して世尊及び諸の弟子を請じて王城に迎ひ入れぬ。謀りて五百の大象を醉はしめて之を刺殺せんと爲せしに諸の弟子衆が城に入るや醉象奮を鳴して進み、牆壁を塘突し樹木を折收し抔して、城內戰慄す、時に五百の羅漢空中に飛び上り難を避んとした、獨り阿難のみ佛の邊りに在り、醉象頭を擧げて至り前で佛の御所に趣むく、時に世尊は大悲心を以て和顏微笑し御口より光りを放ちて五指より五の獅子を現はし同聲に俱に吼ゆ、其聲天地に震動した。醉象地に伏して敢て頭を擧ず、時に阿闍世太子は釋尊の最後いかなる醜態を呈するや之を見んと欲して竊かに隱れて其樣子を窺うに世尊は醉象一同に獰猛狂惡の姿にて向ひ來るも世尊が威容顯赫にして微笑し給ふ時の麗はしき御相の常にも超て妙に淨きを瞻て其御姿は痛く太子を感動せしめた、爲に深く懺悔し奇異の惡を起して世尊に歸依し奉り、謂らく曾て自ら歸依する處の提婆達多は若しも意に逆ふ時には忽ちに憤怒の色が容貌に現ればしも今日世尊を見奉るに斯の如きの危急の場合に臨みても還って和顏微笑し給ふ如きは實に眞の聖者に在すなり。然らざれば何ぞ茲に到らんと、深く前非を悔て初めて佛世尊に歸依し來れりと。

又世尊が祇園寺に於て國王及び大臣等の爲に說法し給ふ折、外道等が佛陀に對する歸依を壞らんが爲に旃茶彌と云ふ妖婦に欲を繫げし腹を大きくして百千の坐を分けて世尊の說法し給ふ高座の側に立て謗て曰く、沙門よ我が夫よ君何ぞ自ら家事を顧ずして還て他人の爲に說法し給ふぞ君獨り自ら樂みて我が若を思はざるや曾て我と通じて我を娠きしめ、今當に臨月に近附けり酥油を求めて小兒を養ふ爲に我に資金を給せよと、衆

悉く驚異の眼を注ぎて之を視る、時に帝釋天は護法の爲に化して一の鼠となりて其の衣裡に入りて盆の繫を嚙み切れば忽ち盆は地に落つ、時に於て世尊は毫も驚き給はず和顏麗しく光容巍々として敢て怒り給はず實にいかなる境遇にも姿色不變にして光顏異ることなく時に集會者、外道等の中傷的誹謗の憎むべきを責むれば外道等還つて自ら赧顏慚愧に耐ずして其座を起てりと。

又、舍衛國の流離王兵を起して釋尊の一族を伐つ。世尊の一族成ると亡さるゝ時に阿難等の釋種の弟子達は非常に悲歎すれども世尊は毫も歎き給はず光顏異ることなし、阿難佛に白して曰はく、世尊よ釋種の危難に罹るに何ぞ悲歎し給はざりし哉、世尊の曰く、是れ過去世の業因ありて此の報を受く我は曾て此のことを知れり、故に今更に歎かじと、實に世尊は如何なる境遇にも姿色變じ給はず、去れば惡意を以て向へる提婆に對しても羅睺羅に對しても常に感情公平にして異ることなしと、實に公明正大なる世尊の人格は彌陀の光明に滿されたる御身心なればなり。去れば姿色の上に表はること斯の如く在ます。

○光顏巍々

世尊の光顏巍々として威神極まりなきは彌陀の威神力と合致したる御意にして能所一體金剛の如く動じ給はざる威神力在すが故である。是れ念佛三昧の釋尊の御意志が彌陀の聖意と合致したる定力の表現である。

世尊の威德巍々として接する人をして感せしむ、去れば何なる憍慢邪見の人も其の威德の前には自ら屈服せざるものはない、去れば世尊成道し給へて初めに阿若憍陳如等の五人の許に詣で、彼等を度せんと欲し給ふに先だち彼等五人共に語らく、悉多太子今は行に疲れ道成せずして我等が所に來らん、若し彼れ此所に至らば我等は昔の如くに敬禮することをゆるさらんと共に約して居りしに、世の諺にも人指せば影さすとか、時に世尊は威儀寂靜として五人の所に至り給ふ。彼等は世尊の威嚴に接するや自ら我を忘れて膝を屈し頭を垂れ

て敬禮せり。釋尊の曰く汝等先きに自ら云はざりしや我等は昔の如くに敬禮せざらんと、然るに今其約を違ふて禮するは如何にと仰ければ彼等は白して言さく、今太子全く眞に道を得給へり。我等は敬禮せざらんと欲せしも君の威神力我等を感せしむ、誠に是れ眞に正眞の道を得給へるが致す所なりと、五人は深く其の威神力に服して竟に弟子とは成りぬ。佛陀は絶對無限の威神光明なる彌陀の靈德を受て而して無限の威力より釋尊の身に現じ給ふが故に光顏巍々たるなり。

世の人意馬心猿外境に憑起せられ、内心に喝きて劇しき浪、停め難く、之れを統一せんには即ち世尊に倣ひて至心に彌陀を念じて心に彌陀を離れず一心金剛の如く自ら三昧純熟して純一無雜の思念、無想の境に入らん如來と合したる時に善と念はず惡と念はず一切の意識超絶し、我滅び如來の威力に滿さる時に自ら威顏巍々たるを得む。

云ふことを休めよ、我等は上根上智の器にあらず、何にして世尊に倣ひて光顏巍々たるを得んと。彌陀の威神力は必ずしも智慧と根機に拘はらず只、己を捨てゝ彌陀を念じ全く至心に念佛する時は必ず三昧成ずべし三昧成ずれば彌陀の威力全身に滿つ故に光顏巍々と表はるに至らむ。去れば敎祖の敎に隨つて三昧を修すべし。

三昧定力功を成せば彌陀の威神力に充され威力具備するが故に光顏巍々の相を現せむ。

上來說き來る三相、諸根悅豫は全體に亘りて五官及び一切の生理機體が完成にして能く鍛あげてみれば金剛の如くに堅くして其の全體は彌陀の慈悲に充されて靈力を以て働く器械である。姿色淸淨は血液の循環や呼吸の氣息、發聲運動等の都ての調節機關が完全にして順調に快轉すべき齊を豐饒にする。

金色にして御丈六尺、項に日光の如くに圓光徹照して其の靈德赫々として尊きこと限りなかりしかば帝は、辱さに勝ず寤めて後に諸の臣下に問はせられた、すると博士の傅毅が御答申上るやう、西方に聖人あり、其敎行はれば治めずして自ら治まり無爲にして成る、何とも名づけやうなし强て佛と云ふ、陛下の夢み給ふところ果して然らんと。(孝明皇帝が金色相好圓滿の光明赫々たる靈夢が卽ち中華人民の心靈を照す光明の曙光であつた) 皇帝は臣下の蔡愔等を使はして佛敎を天竺に求めしめた。すると西域よりも迦葉摩騰竺法蘭との學行共に秀でたる兩尊者が白馬に梵本を載せて來るに遇へり、使者は悅び請じ來りて初めて皇帝に謁したり、兩尊者の神異不測なると佛陀の尊とさに帝は益々歸依し給ひ、或日帝は摩騰法師に問ひ給ふに法王釋尊の世に出て給ふや何故に此の國に出で給はざりしやと法師此に答へて曰く迦昆羅術國は三千界の中心なれば三世の諸佛も皆彼處に出生なされ玉へり、去れば天龍八部も皆そこに生れて佛の正化を受け成く道を悟ることを得たので餘處に生れ給たのでは充分に化を施すことが出來ぬ、故に天竺に御生れなされたのである、けれども漸々に其敎は四方に傳はりて廣く化を施し給ふのである。

佛陀の光明は皇帝及び百官より益々其威光を普く國民の上にも及ぼす勢力は恰も日光が先づ高山を照して後に漸々に平地に及ぼすが如き觀がある。永平十四年正月一日支那に其昔より盛に行れたる處の道敎なるものあり、五嶽の道士等が正月、朝禮の爲に參內するの次で其の仲間に相命じて曰く、今天子我が道敎を棄て遠き外國の敎を求むる依て朝禮を機として表を以て抗義を奏上しやうではないかと、其の表に曰く五嶽十八山觀太上三洞の弟子褚善信等の六百九十人死罪々々奏上す。臣聞く太上は無形無名無極無上虛無自然の大道は造化の前に在り、上古より同じく此道に遊つて百王も易び給はざりし然るに今陛下は道義遠に遊ひ德は堯舜よりも高し窃に承はるに陛下は本を棄て末を追ふて敎を西域に求め而して其の奉する處の神は是れ胡神な

り、其の說く處は華夏に參らず、願くは陛下よ臣等が罪を恕して何れの法が尊いか與に試檢し給ふて後用ゐ給へよ、臣等の仲間道士の中にも或は彼の視眼もあれば遠聽耳もあり、又、博く經典に通じて元皇より已來太上の群錄太虛の符咒まで悉く綜練して其奧に達せざるなきものあり、或は鬼神を使役し靈を呑み氣を飲み或は火に入りても焚けず水を履でも溺れず或は白晝に昇天し或は形を不測に隱す等の方術に至ては如何なることも成し能ざる處なし。恁やうな譯なれば願くば其と比校し何れか正しき法にして陛下の信じなされて宜しきやを定め給へ一には聖上の聖意を安んぜんがため、二には眞僞を辨ずるため、三には大道の歸する處を得んため、四には華俗を亂さざらんために、臣等が願ふ所を聽して若し比對して我が法彼に若かずんば陛下の聖意に任せ棄てむ、若し臣等勝ることあらば妄法をば捨て給へと。帝之を聽し給ひ勅して尙書令宋庠を遣はして長樂宮に入て今月十五日を以て集まるべしと命じ結ん、白馬寺の道士等は三揮を置き壇毎に二十四門を開き南岳の道士褚善信等が各靈寶眞文等の五百九十卷を賫して西壇に置き茅成子老子等の廿七家の書を中壇に置き饌食奠祀百神を東壇に置く。帝は行殿に御して寺の南門に在す。佛舍利經像を道の西に置く、十五日齋已りて道士等が柴荻を壇に和して沈香を炬と爲して經を遶て泣て曰く、臣等太極大道元始天尊衆仙百靈に上啓す、今胡の神が中夏に亂入して主上邪を信して正敎は蹤を失ひ、玄風緒を墜す、臣等が敢て經を壇上に置て火を以て試驗し奉うから尊き心を開示して眞僞を辨ずることを得せしめ給へと誓て便ち火を經に縱てば經に火を點ずるや忽ちに化して悉く燼となりし。而して道士等は互に相顧みて色を失ひ大に怖れおのゝき天に昇て形を隱したくも力及ばず鬼神を使ふものの幾ら呼ても應なく、各々愧恧を懷きて如何とも爲ることも能はず、南嶽道士費叔才は自ら儀て遂に死す。大奇張衍か褚信に語て曰く佛が試る所驗なし其は是れ虛妄の法なればなり、寧ろ之れを捨て宜しく西天より來れる眞法に就くに如かざるべしと云ひければ褚信が曰

中華佛敎の曙光

佛陀禪那

中華卽ち支那の國は世界の中にも古き國にて最も人口の多い國である。現代は大に國勢も衰ひ老大國として世界から疎せられておるけれども古へ最も隆盛なる時代には偉人が叢の如くに蹶出したる國である。後漢より唐宋の代に至るまでには大人物が深山出た、其の大國の精神の靈的方面を照して永遠の光明に導きたるは卽ち佛敎である。若し夫れ支那の國に佛敎の光りがなかつたならば幾億萬の人民は闇より闇に入るの外に道なかりしや疑ふべからず、凭く數百年來無量億兆の精神界を照したる佛敎が支那に入らんとするには必ずや之が前兆なくてはならぬ。支那幾億兆の心靈を永遠の光明に導かんとしての徵象として其の曙光としては如何なる瑞相を以て如何なる人に大みおやは啓示の光を與えたる哉を述んとす。

後漢孝明皇帝が永平十三年に主上の夢に神人を見たり

舞樂上人

阿彌陀佛の永遠に照さるこゝろには
われてふものゝ影もとゞめず
あみだぶと共に住む身はとことはに
無爲の都のなかにぞありける
いまさらに行衛を求むべきもなし
阿彌陀ほとけのなかに住む身は
こゝもまた無爲の都と知られけり
阿彌陀ほとけのなかに住む身は
天地も皆みほとけの中なれば
みおやの外に住家やはある
こゝろなき人はいかに思ふらむ
此の天地の深きめぐみを
天地も皆大みおやのみむねより
はからひませるものにぞありける

村島きし子

○みおやの光を拜讀して
めぐみますみおやの光身にしみて
うれしさあふる我がこゝろ哉

古川哲洲

○みおやの光發行を祝す
世にかをれかをれや花の池見草

く、茅成子曰く、太上と云は靈寶天尊のことである、之れ道化の神である故に妄にあらずと衍が曰く太素は貫倫の名はあれども何にも太素の說たものは無い然るに今、子が貫敎ありと說く、是れ妄ではないか、信ず默然たり又一方に佛舍利の光明は五色にして空中に上つて旋轉して天蓋の如く普く大衆を覆ふて日光も蔽はるゝ、程燿け、摩騰法師は身を隱らして高く飛て空中に坐臥廣く變を現じ天より寶華を雨らして僧の上に散ず、又天樂の聲人の情を感動す、大衆咸く未曾有なりと悅び皆法に聞を遂りて法要を聽き梵音を以て佛功德を歎ず、衆皆之を聽きて自ら三寶を稱揚せしめ善惡の業は皆果報あり六道三乘の諸相は同じからずと又、出家の功德を說く、初めて佛寺を建つれば梵天の福と同じと說きければ司空揚城侯劉峻諸の官人士等千人出家四緣の道士呂惠通等六百二十人出家す、陰夫人王嬉姊弟人婢女二百二十人出家す、十餘所の寺を立ど。中華感兆の心靈を照す曜光とし兆候として孝明皇帝の靈夢に現れる圓光徹照せる端正無比なる金色の尊顏が頭て四百余州の精神を照す本尊佛の啓示ならん嗚呼尊い哉。

◎法話の一節

福岡　中川佛子

生れたばかりの赤子は愛かき親の懷に抱かれながら親の尊さも親の顏さへ見分が付きませぬ、乳房を含みて漸々成育して居る內に親の顏も見知り尊さもなつかしさも感するやうになる、吾等も如來の大御親に抱かれて居ながらまだ如來の親心も御すがたも見分けが附きませぬ、然しこうして念佛して居たらやがては心の曇瞳が近付いて來るにつれて次第に御親の尊さも分るやうになるであらう。

まだ御相も見へず御心も感せられぬ赤子同樣の身であるけれ共、御親は吾れを常攝取の慈光に包んで居て下さることは疑ひませぬ、自分の身體は父母の子であると同時に自分の靈は如來の御親の寵兒であることを確く信じます、如來の子たる吾れは如來の御名を呼ぶことによりて常に聖く導かれ聖く育てられて居るに違ひありませぬ。

之の信仰に活かされて居る私共程世に幸福な身はあり

ませぬ、其の心强さは迚も筆にも口にも盡されませぬ。もしも私共が之の御親を知らずに一生を終つてしまつたら之の人生一生は遂に無駄な無意義の一生として過さねばならなかつたのであります、私共は之の御親を見出した事によつて始めて人生に活き甲斐のあつたことを悅ぶものであります、宗祖が受け難き人身を受けて御悅びなさつたのも之の意義かと伺はれます。

皆さんよ、私共が之の拙なき日ぐらしを續けて居る間、心からとは云へ淺間敬くも煩悶や苦痛に小さき胸を焦すことは常であります、之の苦しい悶への胸に一道の光明を與へて慰めて下さるのは之の御親の外ありませぬ、精神的孤獨を感するときに、大きな力を添へて下さる方は之の御親の外ありませぬ。

何たる心强き身の上でしやう、世の中には之の難有味をちつとも知らないで暮して居る人が澤山あります感に氣の毒に堪へませぬ、それで私共は之の信念のもとに一人でも多くの同胞に之の尊さを御分ちする事が私共の御親より云つかつて居る使命ではありますまいか私はそう信じて居ますから身の不束も顧みず一生懸命に其聖事を盡させて頂いて居るのであります。(北六元)

聖訓叢話

○佛說尸迦羅越六方禮經

一　佛

佛王舍國の雞山の中に在せし時、長者子あり尸迦羅越と名づく、早に起きて頭を沐り洗浴して文衣を着し、東に向ひて四拜し、南に向ひて四拜し、西に向ひて四拜し、北に向ひて四拜し、地に向ひて四拜し、天に向ひて四拜す。佛、國に入りて分衛し、遙に之を見給ひ、往いて其家に至り之れに問ひ給ふ、何ぞ六向禮を爲すや、此れ何の法に應ずるやと、尺迦羅越曰く、父在せし時我に六向拜を敎ふ、何の應なることを知らず、今父喪亡すれども敢て後に於て之に違はずと。佛言はく父の汝に敎へて六向拜せしめたるは、身を以て拜するにあらざらん。尸迦羅越便ち長跪して言さく、願くは佛、我が爲に此の六向拜の意を解き給へ。

是から佛敎沙門の御婦人方や少年諸氏の爲めに聖訓叢話と云ふ標目の下に經文の一節づゝを御取次ぎすることに致したいと思ひます。乃で此の六方禮經は吾人が日常生活の上に最も適要なると且つ、佛敎信者として朝夕佛前に禮拜供養するの心得として至つて大切の御聖訓と信じますから第一に茲にお取次ぎすることに致します。

此の經は釋尊が尸迦羅越と云ふ長者に對して東西南北上下の六方に向つて禮拜する心得を御說きになつた經文であるから佛說尸迦羅越六方禮經と命題られた譯であります。

御釋迦樣が摩訶陀國の鷄足山に在ました時、王舍城に一人の長者子あり其名を尸迦羅越と申した。彼の尸迦羅越は毎日朝早く起きて身を淨め文衣と云つて文模樣のある立派な衣服に着更ひ而して東西南北上下の六方に向つて四返づゝ禮拜を致す。

時に釋尊は鷄足山より出でゝ王舍城即ち摩訶陀國の都へ分衛すと云つて所謂乞鉢に御出掛けになつた其時尸迦羅越の六向拜を御覽になり、汝は何の爲に六方に向つて禮拜するや、又之れが何なる法に相應するかと御問なされた。其時尸迦羅越がお答申上するやと御問なされた。

私の父が存命中私に斯の如く六方に向つて禮拜せよと敎られました、が其れが何なる法に相應するかは存じません、今や父は死亡なりましたけれども今日まで父の敎へられた通り日々禮拜して居ますと云ふ。釋尊は其の孝心を深く感賞されまして重ねて問ひ給ふ、汝の父が汝に六方に向つて禮拜せよと敎へたのは身業のみの禮拜ではなからふと、深く意業に持つべき心得があるぞの暗示を與へられた。其時尸迦羅越は便ち長跪して願くは佛、私のため此の六方に向つて禮拜する意味即ち心得方を說き示し給へと願ひ上げた。

之れまでは經の總起序と申しまして此の經を御說きになつた場所、緣由を明したので、是から正宗分と申しまして正しく釋尊が長者子の尸迦羅越に對して六方禮の意味心得を御說き示しになつてあります

煩惱の犬は追ひども去らず
菩提の鹿は招けど來らず
嗚呼淺間しき哉、恥かしき哉

價値の生活(手段と目的)

奥村辯藏

手段は目的を達せんが爲めの方便である、目的を達せんが爲めには必らずそこに手段が附隨する、手段なき目的は空論であつて目的を持たぬ手段は無意義である。

此の二つは互に相俟つて價値を生ずることである。

繰るが如き十字街頭に右往左往と行き通ふてゐる人々も皆な必らず一の目的を以て歩行してゐる、何の目的もなく只だ脚の行くに任せて往來して居るものはない人生は一つの旅である、吾人は知らずして日々にその旅路を辿りつゝあるのである、アル人は「有漏路より無漏路に通ふ一休み」と言つた、又アル人は「人の一生は重き荷を負ふて遠きに行くが如し」と言つた、然し有漏路とは何んでアローカ、無漏路とは何んでアローカ、又吾々は如何なる荷物を負ふて如何なる目的地に向つて進行しつゝあるのでアローカ、只だ吾々は日々厭行を繼續けて居ることは事實である、ソモ人は何の爲めに生れ來りしや、人は何の爲めに生けるや、ソノ終局目的は那邊にありや、人生の謎は愈々以て不可解である、余は今敎祖善知識の經說を經とし自己の實驗を偉としてこゝに吾人の此土に出來せし目的は永生大靈に合一すべき靈性を養はんが爲めなりと信ず、否な左樣すべく大ミヲヤより預けられたものと信ず、故に吾十年の生命を以て人生の終局とするのではない未來永遠に達せんが爲めに必らず修行通過すべき一の階梯土であると感んずるのである、吾々は常に此の目的に向つて進行しつゝあるのであると信ずるのである、換言せば日常の生活は此の目的を達せんが爲めの手段であると言ひうるのである、そして此の自覺の許に日々活動しつゝある人々のみ眞に價値ある生活なのである、若し左なくして只だ何かは知らないが生きれる丈け生きて居たいとするのは盲人の脚に任せて行くが如く無意義である醉生夢死の徒である、零に零を加へたからとて矢張り零である縱令百年の壽を保つたとて何の價値がアロー。

信者の聲

○如來の御導びき

てつ　女

罪心地の中にはや身は汽車の中にありました、汽車は包み切れない善望と透れ出て歓びと名狀し難い一種の感慨に頭も混亂しさうな此の身を何の會釋もなく東へ〳〵と運んで行きます。目指す處は横濱光明寺、尋ねて〳〵やつと着いたのは各前十時頃で丁度　御説教の最中でございました。アゝあの懐かしい御聲、御上人の御話は一寸途切れました。公職に在つて來る筈のない私が突然に參つたので御不審だつたのでせう。恐懼の極地の御前に跪いた時、何とも知れぬ熱い涙が止めどもなく流れ出ました。夢中で百二十里も彼方の京都から來て見も知らぬ多くの方々の間にあるこの身の不思議さ——様々の思ひが往來して其時は御上人様の御話も耳に入りませんでした。朝食をなつた時、御挨拶申して、感冒のため休校になつたごと、東京の生活改善風呂等を見ることを勧められて、こちらの御別時も開けて居る事故、急に行きたくなり校長に三日のゆるしを受けたこと抔、突然に來ることが出來た譯を申し上ました。御上人はお歓びになつて「全く如來様の御導びですれ」と仰られました。是が御導きでなくて何でせう。自分さへ餘り突然の思ひ立で、明日の今頃は此處に來ることが抔思ひもよらなかつた事でもの。又も涙が止まりません。

此處は久保の浮世ばなれした地、西南に面した此の二階から眺めます富士の拙山は憎げもなく姿を現はして、前は一體の四、人家とてはなく全く油絵でも見るやうな鉄色でございます。朝日の昇ります時は水も岡も片面は黄金にかゞやいて富士は薄紫に匂ひ骨は歓喜と善望の色に浸まれて仕舞ます。日が西に傾いて山の端に近づきます時の莊嚴さ。「紫さに匂ふ入日のまなくば何にたとへむ清きみ國を」「うらはしき入る日かゞやくさまざまいり清きみ國のたゞひなるらむ」お上人の御歌もいゝる鉄色なお顔みになつたのでありません。

此の景色こそ貴いお別時の空氣に私に溶け仕舞ました、京都にあつてよこれた中に生活して居つたことが何だか遠い〳〵昔のやうに感じられます。

お説教は一々私の肺腑を突ぐりました、『極楽に行くのではない極楽が來るのである、歩いて來るのではない明るくなつて來るのである』嗚呼私はこの宇宙に佛ちて居る光りを知らず倉の内に自らを閉込めて苦しんで居つたのでした。『人を殺す罪は最も重い其内に父を殺し母を殺すのが尚重い、併し一層重い罪がある夫は已が愛性を殺すことである』是が平氣で聞けますか。師走日も過つて來ました、京都の虚偽の生活が嘔ゞ頭にひらめきます、其のたびにゾッといたします。此の淨められた心がグループに入つて又汚れる事はないでせうか『捨てよ捨ての我を殺せば己れを土に捨て、腐つて仕舞ふから芽が出るではないか身を殺すから生れるのである』このお言葉を聞いてハッとしました、今まで自分が離すまい〳〵と一心につかんで居つたのは何だつたのでせうゝ……

捨てを捨てます、私は自分が夢ん遊つて居つたことが解りました、京都へ歸るべき日も來て居ります、私は決心します、今智と過留することに新しく力強く生れてゐた方の前に參りませう。あなた方の虚偽の生活に泥まないやうな心配して居た私は法の燈火を蔵いて參ります。

私はお上人にお供をして眞に生きる道を求めて富士山へ參りました。之れも如來のお導きによること、有難く感謝の念佛を唱へつゝ……

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

◎常隨給仕して上人の御教を仰がれつゝある恒村夫人へ

福岡　中川佛子

奥様！　あなたは何たる御幸福の御身の上でしやう、この間から當麻山や芝の多聞寺宛に手紙を差上げましたやうに、私はどうしても御身の御幸福をよろこばずには居られませぬ。

昨年の七月私が本山の當在布教中に毎朝のお參り、それが御縁のはしとなつて、御上人はあの研究的態度から其の活信仰に入られました。それも御身の御熱心から其他高女の德永先生や工大の中井學士や、一人の熱烈な信仰は必ず他を燒き盡さずには置きませぬ。

然しあの頃迄は御身の心靈中に輝く信念の炎は夫れ程に熾烈ではありませんなんだ、澄恵嬢を亡くされました お悲しみが昨年四月の黒谷の五重となり、背通の念佛信者の籍に入りになつた迄でありました、それが不圖した御縁で、如來は私に山崎上人を紹介すべき使命を與へて下さいました、それがいろ〳〵の因縁を造り出して、別府の温泉場での聖き一盃夜の物語り一語も聞きもらさないと云ふ熱心の態度で御聴き下さつた事攝津の片田舎の一農舎に夜を徹して上人の御法話を味はつた事、今は早や半歳過ぎた一場の夢、イヤ結果は決して夢ではありませぬ、御主人の益々深く御進みになるに連れ、御身の求道の御志は愈々猛烈に燃え出して、何ものか握らずばとの勇猛心で、百萬邊の御別時にも御滿足できず途に思ひ切つて上人の御許を慕ひ玉ひ横濱に當麻山に、今は上人に常隨給仕の御身の上、私はあまりの難有さに泣かされました。

奥様！　今頃は聖き上人の御膝下に、香り床しき御法の花を手折り玉ひ法喜禪悅、夏心御滿足の御有様目前に見る心地が致します。

過日多聞寺よりの御手紙に『今度と云ふ今度は今迄の常子は京都に死して更に新らしい常子に活きて歸京する覺悟と』女性の御身としてよくもそれ程の御決心が出來たことと之れも全く如來の御はからいかと雖有涙に咽はずに居られませぬ、四十日からの長時日擬つた御

生活に身を委ね玉ふ御身の御志しもだが、夫れを御許しになつた御主人の御心の尊さも感せずに居られませぬ、御身の御幸福をよろこぶのは之れであります。

御身は聖き如來の御親の外に、夫れに導き玉ふ聖き上人の師と、斯くなさしめ玉ふ尊き御主人と、御身のまはりに若な善知識が付き纏つて居られます、而も御手纏ひの御子さんも居られませぬ。御身の御境遇のすべてが御身を聖き道に引き上げやうとする御縁ばかりでありますもの、多少御宅の事も氣にかかりませうけれども之れ程好縁にまもれ玉ひし御身、などで進まずに居られませう、之れが御身の御幸福と喜ばしく感ずる所以であります。

過日御身の再び當麻山へ御上りなさつた後に御宅に御伺ひ致しました折、御目にかゝれなんだのを嬉しく思ひました、そうして御主人より種々承りまして御二人とも非常な御進み方に感激されました。

之れと云ふのも其源にさかのぼつて見れば一昨年の五月に澄恵嬢のはかなくなられましたからではあるまいか、そう考へて見ると今日の御身の御幸福は、お嬢さんの死の賜物と思はなければなりませぬ、澄恵嬢の死夫れは御身方を之の尊き道に導かれる恩寵であつたに違ひありませぬ、之れを通じて益々如來の不可思議の聖意を導く感する外ありませぬ。

親しく久しく上人に師事し玉ひし御身、家を忘れての長の御修養、更に新しく生き歸へられた御身、御所感のかず〳〵を早く承りたくてたまりませぬ、不幸にして三月の祖山にも參加できない私、今しばしは御目にかゝる機會も得ますまい、せめて紙上でなりとも承はり度く存じます、右はあら〳〵

宗祖證號の記念日　西肥伊萬里の常光寺より

豫告

故淺井師の追善

長岡市淨土宗光明會にては來る春暖の候を期し故淺井法順師一周忌を營み又、五月中岩井智海師を招し授戒會施行に就き別項の案内狀を會員に發したり。

本年七四月二十日頃を期し、光明會創立者故淺井法順上人の一周忌執行仕度、同上人は稀なる人格者にして斯界の模範者たることは會員諸賢の熟知もらるゝ所、今般本會主催さなり一周忌執行に當り祀念品を[illegible]代頃[illegible]者の御勉華に成れる色紙短冊を會員一同に贈呈仕度目下其準備中に有之候間て改めて御案内申上候に付其節は御參會相成度此段豫告申上置候

謹告

○九州の讀者君諸へ

各地幾多の熱心なる俗道友の切なる御求めに應じ昨秋十一月より山崎上人執筆の月刊雜誌『みおやの光』を出來たことと之れも全く如來の御はからいかと雖有涙に咽はずに居られませぬ、四十日からの長時日擬つた御

御願ひ

私儀祖山念佛三昧會中會衆各位より雑誌みおやの光御申込者の住所御姓名又は誌料受領を控置きし手帳を麁忽にも紛失致しました、就て御手數の段恐入ります、が三昧會中みおやの光新規御申込者の住所姓名又は誌料御拂下された分をはがきに て至急御知らせ下さる様特に御願致します

千葉縣松戸町光明寺

中村禪定

謹告

州各地へも此所彼處と一部若くは數部宛御送り致しました何卒數部御受取になりました方は檀信徒若しくは道友の方々へ御頒ちを願ます、尚ほ御手數恐入ります が讀者の統一上引續き御愛讀下さる方は部數と住所姓名を一々「筑前穀手郡新入村長安寺」宛御申込ください、本年五六月より本紙も多少體裁を改め大に發展を計る考であります。若し本年四月までに引續き購讀の御申越しなき時は自然發送を御遠慮致すことあるべく御承知置き願ひます。（發送部）

○誌　料　（一ヶ年部　前金五錢　郵税共　金六拾錢）

○廣告料　（五號活字廿四字詰一行前金五拾錢　半頁金五圓　一頁金拾圓（前納ノ事））

大正三月十五日印刷（毎一回發行）

編輯兼發行人　中村禪定

印刷人　秋塲熊太郎　東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

發行所　光明會松戸敎會所　千葉縣東葛飾郡松戸町二丁目　振替東京四九三四八番

大正九年四月十五日印刷發行　大正八年十二月十八日（第三種郵便物認可）

ミオヤのひかり

第壹卷第六號

佛の救世大慈の父と念ず

大慈悲なるミオヤよ、あなたは光明遍ねく十方界を照して念佛の衆生を攝取し給ふ。我等衆生の愚蒙なる、ミオヤの聖意の在す處を知らず自ら聞きに迷ひて苦を受くること極まりなかりし。ミオヤの大慈悲子等を憐み給ひて昔、法藏菩薩として世に出で給ひ深重なる慈悲を以て若しも苦海に沈む子等を救はん爲にはたとへ身を阿鼻極熱の火に燒かるとも寧ろ甘受して忍んで終に悔じとの子を愛する聖意を現し給へぬ又近くはミオヤの子を憐れむ聖意を示さんが爲に釋迦牟尼佛として此の世に出まして、世は悉く我が有にして其中の衆生は皆是れ我が子と曰ひ、凡ての子等が爲にミオヤの慈悲に便るべき眞理を敎へ給ふ。即ち昔し法藏菩薩と現れ給へし時の誓願なる。

十方衆生よ至心にミオヤを信樂して聖意の中に生れんことを望みて聖名を稱えて專ら念ずる時は光明中に生るべしとの聖旨を示し給ふ。

我等は深く聖意を信じ、光明中に生れて日々の靈の糧を與らるゝやうに聖名を稱えてミオヤの恩寵を仰ぎ率つる。

◎我等が敎のミオヤ

山崎辨榮

○彌陀の光明に滿されたる釋尊の五德

先の諸根悅豫等の三相は彌陀の靈德に充されたる釋尊の身體形色の上に現れたるを之を模範にして何人も彌陀の信仰に入る時は凭やうに悅びと淸きとが形體の上に現るゝやうに成り得ることを御示しなされたので、是より下の五德は釋尊が彌陀の心光に融合し靈化したる人格の內容實質に於て最も美に靈光に充滿たる狀を示しなされた、即ち彌陀の靈力に充されたる釋尊の生活々動の德を明し給へるのである。斯の五德は靈的人格を具備する要素として一も缺てはならぬのである、されば吾等も釋尊の模範に倣ひて精神の感情も智力も意志も俱に彌陀に靈化せられて出來得る限り圓滿なる人格を形成するやうに期すべきである。

五德とは

今日世尊奇特の法に住し
今日世雄諸佛の所住に住し
今日世眼導師の行に住し
今日世英最勝道に住し
今日天尊如來の德を行じ給ふ

初めに今日世尊奇特の法に住し。

實に地上唯一の靈たる釋尊の聖德の赫々として大千を照し給ふ人格は宇宙の中心本尊たる最尊最靈の彌陀の德光が顯現せしことは喩へば太陽の光が金剛石に反映する如く靈的威德の狀態である。

世尊――初めに世尊と稱したることは、宗敎は先づ第一に信仰の門に入らんには無上の尊敬を以て絕對的に

歸命頂禮すべき本尊の實在を信じて己が全身全幅を献げて仕へ奉るべきものである。如來は實に絕對的に尊い靈體に在ます無上の威神力無上の權威者である。如何なる人も斯の最尊者に對しては絕對的に服從すべきものである。世尊は絕對的の權威者として一切衆生に儼臨して一切を命令し降化する權理を有し給ふ。

宇宙中心本尊たる最尊の威權者たる釋尊なれば現地上に於て衆聖中の第一である。全體宗敎は信仰の對象たる本尊に對しては無上の尊敬を以て絕對的に信服して自己の全生命を献げて奉へる所に於て成り立つものである故に最も至誠心卽ち眞面目でなくてはならぬ。又釋尊は、一切天人の崇敬する所、彌陀の靈德の充たされたる人格なれば身は人類と同じきも其の御精神は彌陀の分身に在ます、威神力と自在力とを備へたりて一切の天龍八部等の爲に尊崇せらる故に亦、世尊と云ふ。

奇特の法――奇特の法に住すとは釋尊は法に於て自在を得給へば神變不思議神通自在、聖意の如くに天地自然を自由にし給ふ權威をします、而して一切の凡夫惡魔外道も悉く一度膽仰すれば其威力に服し邪見憍慢の心も摧伏し降化し給はざるはなし、其の威神力を以て又、神變不思議の力を以て奇特を現じ給ふ目的は何故となれば、すべての人々の罪惡我慢等の皮殼を打破りて人生の最大目的なるミオヤの光を被り聖意に稱ふ人に改造して新らしく生れさする爲である。

奇特卽ち不思議の中に佛法ほど不思議なるものはない、世の最尊靈神なる佛の爲作し給ふ所不思議ならざるはなし。無明罪惡の衆生を改造して聖者の伴侶となし、常沒生死の人をして永遠の生命となし、靈的人格に革新せしむる威力のまします是れ實に不思議である。

○世尊と奇特の三位

世尊は奇特の法に住し給ふに詳かに明さは法報應の三身共に各、世尊なると共に奇特の法に住し給ふことあり。法身としては宇宙の一切萬法の大原則としてすべてを統攝し給ふ大權威者の故に宇宙全體の天則的立權

者として最尊者である。報身としては淨光明界に在まして一切衆生の心靈を開發し靈化し人々を光明生活に入らしむる大權威者である故に心靈界の一切諸佛天神中の最尊位に在ます故に世尊である。法身の領分と報身の領分とを區別せば宇宙は本、一體なれども肉眼に睹ゆる自然界の方面と又、心眼開きて觀るべき心靈界の方との二面あり、前者は法身の領する所、後者は報身の領する方面である。法身は天則的に天地萬法の原則として萬物を產出し養成し保存し生滅變化の本源にして卽ち天則の大ミオヤにして現に吾人の地上に人間として活かさるゝは法身の法則と能力とに依るものである。

報身は其の法身より產み出されたる衆生の心靈の卵子を慈悲と智慧との光明を以て攝取して靈的に孵化せしめ給ふ。吾人が光明の生活に入りて現在より永遠の生命として佛化し給ふのが報身の御力である。

應身は現世界に御出ましなされて衆生を敎へて報身の光明に歸命信賴すべきやうに導びき給ふ釋尊である。

釋尊の奇特の法を施し給ふに手段と目的とあり、手段として一切の凡夫外道等を降伏せん爲には種々の神變不思議のことを現し給ふ卽ち身より水を出し火を出し空中に於て大身を現じ又、火に入りて焚けず水に入りて溺れざる如きの奇績を現したる其の目的は人の精神を根本的に改造して凡夫の迷を轉じて聖者の悟りとなし、生死の衆生を永恒の生命とし所謂、凡夫を變じて佛とせんが爲めである。人格を根本的に改造する程の不思議は他にあるまい。是れ卽ち佛法の不思議である。

若し此に大山あり之を咒力を以て遠きに遷さば何人も其の奇蹟に驚くならん。然し其等は末のことである、惡道に墮つべき惡的人格を佛の敎化の下に忽ち淨土に生るべき光明の生活たる人格に生れ更たならば夫こそ眞の奇蹟である。世の人が火に入て焚けず刀劍の斷々に壞るゝ如きの奇蹟に驚きながら最も奇蹟中の奇蹟なる人格を靈的に改造するの奇蹟に感せざるは實に愚である。見よ釋尊の靈力の不可思議なる蓽屈磨の如き怪力なる凶漢も一言の敎化の下に最も聖者とも云ふべき靈的人格に改變せしめ給ひ又、一會の說法に無慮千萬の人の人格を根本的に改造する威神力在ます、實に世に尊崇すべき不思議の法に住する聖者たるにあらずや

聖善導大師の傳

佛陀禪那

聖善導は大唐に於て專ら彌陀の光明を宣傳なされたる祖である。自ら彌陀の光明に於て心靈に活き活ける靈光を以て當時の士女老若を問はず之に接する者は悉く靈に復活せしめたる其の教化の盛なる實に烈火の勢であつた。されば瑞應傳に佛法東行してより未だ師の如く盛德なるはあらずと、佛法が漢地に渡りて凡そ六百年無數の知識高僧輩出せしも眞の宗教的素質を以て自行化他の盛なる實に導師の如く盛德なるはなかるべし。去れば瑞應傳の讃嘆過分にあらず。導師は佛教中のボーロである、導師の光明宣傳は現代と異て居る故に後生主義である其は時代の然らしむる所、然れども自行化他彌陀の光明を以て時の人格を靈に活かして光明の生活に入れしめたことは疑ふ餘地がない。光明主義宣傳の大唐の祖として今、忍徹上人の大師傳に依て光明主義の同胞に紹介せんとす。

大師諱は善導字は淨業と云ふ。阿彌陀佛の化身であると、其本、何れの人たるを明かにせず。或は姓は朱氏にて幼にして密州の明炤法師に就て出家せられ、初めには法華經や維摩經を誦じ給ふた。或時西方極樂淨土莊嚴の曼荼羅を見て深刻に印象を與られ嘆じて曰く何にして當に質を遷蛻に托して神を淨土に棲ましむべしと意は此の穢惡なる肉體を取換て蓮華の上に生ける法性常樂自然虛無の身となり、神を無漏の淨土に栖みあそぶことに爲りたいとの心である。

具足戒を受けてのち妙戒律師と云ふ方と共に觀經を看て非常に感激せられ悲喜交々起つて今迄久しく迂僻の道に徒らに心を勞して居つた、若しも此經に遇はなくば迚も度かることは出來ぬ、此の經こそは眞に佛道に入るの要津である餘の行業を修すれは迂僻にして成就し難い唯此の法門のみ速かに生死を超ゆべし、我幸なる哉今この法を得たる。

忽ちに自ら思ふに教門は必ずしも何人も同じ一道一途より入るにあらず若し自己の機根に適せずば功即ち徒

らに設けん。佛の教門甚だ多途なり何れの經か全く自己の機に契ふかを知らんが爲に大藏經に投して手に信せて之を探ぐるに觀經を得たり。便ち喜んで誦習なされ恒に諦かに思惟し冥想して淨土を觀想す、是に於て篤勤精修して頭然を救ふ如くになされた。

昔の惡逆法師の偉大なる高德の芳躅を欣慕して遠に廬山に往きて其の規模の大なるを視て乃ち廓然として遠師の如くに念佛三昧に由て道を得んとの思ひを增しなされた。其後歷々各地の高德名師を訪ひ遠く沙門に求むるに修行の功微に理の深きこと又、般舟念佛三昧に出づるものあらず、斯の念佛三昧發得するにあらずば寧ろ死すとも動せずと畢命を期して修し給ふ。

有緣の地を卜して終南の悟眞寺に遁れ給ふ、爰に於て一心に三昧を修するに未だ數年を出ざるに觀想彌々勤みて疲勞を忘れて已に三昧の深妙を成じ三昧中に備さに淨土の寶閣瑤池金座等を觀て宛ら目前に現れしかば溺を流し身を地に投じて、之れ皆佛恩の然らしむる處と感謝して曰く既に三昧成就して淨土を感見す是れ當

に證を得たれば先づ今よりは有緣の地に於て世の人々に彌陀の慈悲を傳へんものと。

初めに西河の道綽禪師が晉陽と云ふ處にて方等懺法をつとめ又、九品道場にて觀經を講じて念佛を弘通することを聞て其を慕ふて貞觀十五年千里を遠しとせずして往て道を問べく旅立ちなされた、時しも玄冬の首に逢ひ風が落葉を飄して深き坑塡まれり、乏れ此の落葉に滿たる深坑こそ修行に適する處と遂に瓶と鉢とを携ひて其の坑中に入て安座念佛して精神が三昧に耽りて覺えざるに已に數日を經過しぬ乃ち空中に聲ありて曰く是より前み往けよ遊履してまた滯停する勿れと、遂に坑を出で前程に遙みて道綽禪師の所に至りて豫ての宿心を述べければ綽公より觀經を授けられしかば師は卷を披きて之を詳かにするに比來の觀る所淨土の勝相に宛然として目前に現はれ即ち定に入つて七日間起ち給はざりし。

或人師に御尋ね申して曰く弟子常に念佛して往生を願ふれども往生が得らるゝや否やと師の曰く各一葉の蓮華を辨じて之を佛前の乾ける地に插みて七日間行道して花が萎まざれば即ち往生を得る兆であると之に依て七日間勤むるに果して花が萎まざるを見て並に往生の決定せるを知ると。

道綽禪師が師のいかにも三昧の深諧を歎じて因みに師に問ふて曰く願くは師よ定に入て道綽が往生得らるゝや否やを觀給へよと、師は即ち三昧に入るに佛身の百餘尺なる大身現じ給ふ問ふて曰く、道綽は現に念佛三昧を修しておるけれども正しく報身の土に往生を得べきや否やを自ら知らざれば之れを告げ知らせ給へ、猶又何年何月に往生するやと佛の曰く「樹を伐らんには連りに斧を下せ、緣なきには共に語ること勿れ、家に還らんには若を辭することを勿れ、又當に道綽に三罪を懺悔せしめよ而すれば方に往生すべし。三罪とは一には嘗て經と佛像とをば擔端の下に置て自らは深房に居りし、二には功德をなすに出家の人を驅使したり、三には屋宇を營造するに多くの虫の命を損傷せり。十方佛前に於て第一の罪を懺し四方の僧に回して第二の罪を

悔ひ、一切衆生の前に於て第三の罪を懺ぜしめよ。」又問ふ終る時に何の瑞相ありてか人をして見聞せしめん答て曰く亡する日我白毫の光を放ちて遠く東方を照す此の光り現ずる時我國に來生すと、大師須臾にして之を綽師に報じて靜かに既往の咎を願思するに皆云ふことと虛しからず之に於て洗心懺悔し訖て師に見て即ち曰く師の罪滅せり後に白光が照觸すべし是れ師の往生の相なりと果して終る日三道の毫光房內を照せり。

東都の英法師は華嚴經を講ずること四十徧、後に綽禪師の念佛道場に入會して深く三昧に入て念佛の活行なるを悟り嘆じて曰く自ら悔むらくば多年空しく文疏を尋ねて身心を勞するのみであつた。何ぞ期せん還つて念佛の不可思議にして人を活かす妙法なりとは。師の曰く實に然り經に誠言あり佛は決して妄語し給はず。續て唐の都なる長安に至りて法水の聲を聞くに曰く、念佛を敎ゆべしとの佛の啓示を蒙ひりて遂に五會敎なる會を設けて念佛を以て廣く勸化し給へり。信者の中に至心なる者は師の念佛する時佛が口より出るを見奉

つる。三年の後には滿長安城の人皆敎化を受けて念佛す。男女の僧俗を擊發して貴賤賢愚を問ふことなく屠沽の輩に至るまで皆亦開悟せしむ。

師の敎化の甚だ熾なるを見て或は嫉み或は憎みて妨害をなすものあり、西京寺の內に在て金剛法師と念佛と餘行との勝劣を校量し給ふ、高座に昇り發願して曰く諸經の中の讚揚の說に準ずるに念佛の一法淨土に生ずることを得、一日七日一念十念定めて淨土に生ず、是れ眞實にして衆生を誑すにあらずば願くは此の堂中の佛の二像をして總て皆光りを放たしめ給へ、若し此の念佛の法が邪惡にして淨土に生せず還て衆生を誑惑するものならば今善導をして高座の上より大地獄に墮して長時に苦を受け永く出期あらざらしめよと、如意杖を執て一堂中の佛像を指し給ふに尊像皆光りを放つ。

（つゞく）

○溜島　山崎上人は今月二日より一週間長野縣上伊那郡赤穗村安樂寺五重會御親修あり、其より同二十日頃迄同縣松本町訪方面御巡錫。同二十二日より一週間新潟縣長岡市法蔵寺に御來錫、二十九、三十日新發田町大善寺、五月一日北蒲原郡中條町、二日三日村上光徳寺、四日より八日迄新潟市善導寺、九日より十一日迄柏崎町極樂寺、十二日十三日は岡野町西照寺に御巡錫の豫定の由に承はる

○常盤に匂ふ花

筑前　坊

拈華微笑は以心傳心の妙境、今や大自然は現に吾等の前に梅花を拈じて宇宙の妙趣を誇するに似たり、心して觀よ一輪の梅花にも深に微妙不可思議の靈味を覺ゆ枯木に等しき初冬の梅樹も新春の陽氣迫り來れば自ら内に藏めし性は外に發して紅白花瓣芳香馥郁として枝頭に在り、古人が「年毎に咲くや吉野の山櫻、木を割りて見よ花のありかを」と詠せし如く梅と櫻と花は違へども理は一なりたとひ木を割りて花を求むとも其は遂に得べからず、左れど無より有を生ずる事は無きが故に花と咲き香と薫じ實と成る所の不可思議靈妙の性は、泯然として内藏せるなり、其性が内因となり雨露土壤日光等が外緣となり此に内外因緣相待つて時節到來する時は荒寥たりし初冬の山野も漸次變り行く花の莊嚴に香り床しく「法聞け〳〵」と鳴く鶯の聲に新春の氣に蘇生へる喜の新天地は現はるれ。

心靈界なる極樂淨土は吾人本有の靈性の花開く處に來たる精神上の春の天地である、肉體を解剖しても骨肉腑髓等、心を探るも三毒五欲、木を割りて花を認めざるが如く吾等自已を顧みて性ある事を知らず徒らに實の持腐されをして冥より冥に入る有樣は法華經に長者の兒が寶珠を持ちながら之を知らずして貧里に迷ふに譬へ給へるが如し、何の幸ぞや「奇なる哉〳〵一切衆生内に佛性を具ふ」と、若し此の性開けぬれば靈界の新春は當所に來たり、温かなる慈悲の風は徐ろに流れ、靈氣感する所自ら靈育の色香を增し、慰安と滿足と新しき元氣とに依て憂世の惱みも忍び易く、實に此土に居ながら極樂の思して佛子のつとめをなすなれ、

盡日春をたずねて春を見ず
芒鞋踏みあまねし嶺頭の雲
歸來却て梅花の下を過れば
春は枝頭に在りて既に十分

極樂か有るか無いかと學問詮議で一生を盡すとも其は盡日春をたづねて春を見ずの愚を學ぶに過ぎない、己

が林檎の果實が出來た事は事實である。即ち無の内より有が生ずる事を吾人は肯定する。

是れ然し乍ら通常の認識の立場より論じたるもので無は故無くして有たる事は出來ない。是を故ありと認識するは其の人の有する認識の程度により大差がある人が水とする所は餓鬼は火であり魚は棲家であり天人は瑠璃と見る實現せられた自然界は實在の儘であるけれども認識の程度により百里の差が出來て來る。之れ宇宙の理想を現實に顯すこと得る程度の差が即ち認識の差となりて現はる。

吾人が佛を認識し得たのは既に佛の理想を獲たのである。吾人は佛を認めたる刹那に於いて之の理想は當然實現し得べき可能性を有する唯之の理想を實現する迄に幾多の道程を經過する過程の差が即ち水の四見不同とはなつたのである。

現實が理想を生むのでは無く理想が現實を生むのである、理想は完全である、現實は不完全である。即ち完全無くして不完全は無い吾人が顯す所の現實すら完全なる理想の尺度から割り出されたものである。不完全は只その完全の幾許を實現したかを知るのみである茲に於てか佛無くして衆生は無いてう理論は確實であらねばならぬベーメが『人ガ神ニナルノデ無イ神ガ人ニナルノデアル』と云つた言を余は肯定する即ち完全無くして不完全が無いように佛があつて衆生があつたのである。佛と衆生との間には一脈の春風が通つて居る是れ親緣である衆生が佛に求むる心は即ち佛が衆生を攝する心である、其の間平等無差別自力他力を分たない。

佛は其の廣大無邊の智慧の中から衆生が求めんと欲する所に從ひて智慧を與ふる其の與へらるゝ程度は求むる者の有する要求の範圍を出でない。吾人が佛に完全を求むる所以は吾人が不完全である故である。吾人は佛に對するとき既に自らの不完全を知つて居る可き筈であるに係らず往々にして佛に對して或る條件を附して求むることをする、是れ豫め自己の小なる容器を以て佛の智慧を受けんとするもので、自己の主觀を絶する事が出來ない小き自尊心を有する自力門の人に往々見る所である。從て佛より受けたる智慧は自己の有する容れ物の大きさを出で無い。茲に於て自力が他力かの問題は最早既に問題では無い。吾人は吾が山崎上人の八面玲瓏たる靈格を仰ぐ毎に切に之の感を深くする。

心の靈華開く時其處に淨土は見つかるのである。

さて其の花を開かしむるに至るには恰かも植木の如く木の根を大地におろし次で雨露や肥料の助けを要し、更に太陽の温き光を受くべきか如く、吾人の靈も如來の大慈心に歸命安住する時大地に根を下すのである、而して五正行等を初め凡て靈の修要となる事柄は皆是れ培養肥料である、斯くして更に靈界の太陽たる報身如來の攝取の光明を蒙る事が一大要件である。

同じ一本の木でも日當好き方の枝は日蔭の方の枝よりも早く花の咲く如く、靈性の花も如來の心光護念を蒙る人は早く開くべく、信ずといへども念せざれば遲かるべし、其の所以は「如來の慈光は十方界を照せども唯念佛する者のみ光照を蒙る當に知るべし本願の重顯最も強し」と善導大師の仰せられたる如く攝取の光明はみおやのお思召として念ずる所を照し給ふが故に吾等は御親の本願に順ひ煩惱の家の日蔭住より心を如來の方へ運び出す樣にすれば大悲の光に親み温められて花も自ら早く咲き出るのである。

如來の慈光蒙れば　七覺心の花開き
神祕の霞感妙にして聖き心によみがへる、
如斯く内因の靈性は如來の大慈悲を土地とし見聞等を肥料とし願力光明を增上緣として成育する。此の靈の育ち行く分に應じて靈我實現的に現在より佛子の生活を營み人世をして彌陀の光明領土と爲すべく人心を指導し社會を改善淨化し行く事が如來に仕ふる吾等の本分なりと信ず。

自力か他力か

恒村　夏山

理論上より云へば無は何處迄も無であり有は何處迄も有であるべきである。

是れ然し乍ら無は無と云ふ意味に於いて既に有を脱する事は出來ない即ち無は無としての有であり有は有としての有である結局に於いて有無は無差別である、是れ無より有か生ずる事を自然界に於て證明する所以である、林檎の實は林檎の樹には發見する事は出來ない

◎ノートの中より

福岡　中川佛子

四五年前一度目を徹した『病間錄』其時は左程感じなかつたが、過日吾が敬愛なる京都高女の德永女史にすすめられ熟讀して見ると、他山の石とも思はれず、共鳴する點少からず、深刻に感せられた點をノートに藏した其二三を。

○其の宗教の秘鑰を握らんとするものは其の心情を赤子の如く打開けて自家靈覺の聲に聽かざる可らず。

○熱烈なる思慕！是れ我儕が天地の至高と面する莊嚴なる殿堂にはあらざる乎。

○神無きを憂ふるものは先づ神に對する熱烈なる思慕の情無きを憂へざる可らず、吾れに熱烈なる思慕の情無くして神を見んとするは眼なくして光を仰ぐものなり、哀れからずや、所詮神を見るは感ずるなり實參實證する也、觸發する也。

○吾人が理性の燭を點じて正面より自覺的に至高者を尋ぬる時は彼れはしば〳〵吾人を回避す、恰も霧裡の幻影の追へば追ふ程遠ざかりゆくが如し。

○ルソーの懺悔錄の一節に、汝の心をして常に神の存在を顧ふやうなる狀態にあらしめよ、然らば汝は決して神の存在を疑ふことなかるべし、ルソーが神の存在の唯一證據は自家直接の感情の要求を外にしてはあらず、彼れは神なき生活に得堪へざりしなり。

（まだあるが、餘は次號に）

幸なる哉如來の寵兒

辨常

○辨常は室咲きの花であります、憂き世の風に吹かれば忽ちにして凋落せむ。哀れ纖弱き花であります、百合や野菊の如き尊い活氣がほしい。

いでゝは萎まむ、あはれ價値なき花なれど
如來の賜ひし色と香は、百合や野菊に劣らじと
光明あびて身を清め、慈愛の水を根より吸ひ
いや美しく香ばしく、咲て匂ふて見ぬ人の
心の奥に溶け入らむ。

來れ人々この庭に、みおや佛の育みを

受けて永遠常樂の、命と幸の花さかせ。
風のまに〳〵香を送り、修羅のちまたの人々を
餓鬼畜生の人々を、醒まし導き連れ來り
此の花園の人とせむ。

○辨常は如來の寵兒であります、春の日和の如く平和な氣分にてみおやの盛視の下に成長して居ります。敎へと慎みと反省と感謝さの寶樹の繁れる向上の園に遊んで慈光の中に無心であります。

辨常は父の賜ひし實の木の實を食ひつゝ獨り小蹬で歌つて居ます。去年の秋ゲシノショウコが咲て居た。野山を辿り津の國の、奥の里なるなづかしき
父の待たれし法藏寺、たどりつきたる嬉しさよ
兄なる夏山と共なりき、姉なる慧月と共なりき
三十二年の人の世に、里子となりしその間
睦み遊びし友達の、意地の惡さも我まゝも
無貫の罪もあげすみも消えて跡なくなりにけり
夢の中なる同胞よ、醒たる人を友に持て
惡と不義理をしやうとも天につばきのやうでなく
身の汚れを洗ふ。

▲慧月の清光、夏山の風情、敬すべく愛すべき哉。如來の光明は正覺の大道を、はてなく照し、道友の後座を追ふて吾辨常、獨り牛歩遲々たり。

雜報欄

第四回祖山念佛三昧會

例に依り京都東山知恩敎院勢至堂に於て三月一日より一週間第四回別時念佛三昧會を淨修せり。會するもの七十餘名。

時之れ陽春怡蕩の候、地は之れ雕塵秀麗の境、人師は學德一世の師表たる山崎上人の指導の許に此の淨業を修す、吾等何たる宿願ぞや。朝は鷄鳴と共に起き、專心念佛の聲山谷に響き、法悅の氣堂内に滿つ。日に三回上人の難有き御法話あり。一七日の別時中些の障碍もなく七日午後一時結願。一同祖廟に參拜回願し下つて阿彌陀堂、御影堂に拜禮し同三時雪香殿に於て本山の鄭重なる晩餐の饗を受けて感悅理に解散す。

茲に結衆一同の芳名を記し名刺交換に代用して相互の親交に資せんとす。

京都大本山百萬遍知恩寺法主中島僧正。同大本山清淨華院　主鍋谷僧正。同東山總本知恩院内中島周典。百萬遍知恩寺内高橋榮太郎　京都帝大法學部矢部羣二。同帝大法學部辻三省。京都府立第二高等女學校鄭永あい子。京都市高倉通松原下島香寺内伊藤典敬。同二王門信行寺河村隣雷。同上京區田中大堰町中井常次郎。同北白河久保田町三番町松井一郎）同寺町高辻永養寺前住石井俊　觀同下立賣千本西入結正寺五島宣暢。同寺町淨淨華院内貝島孝順。同蛸薬師水屋町西入島みよ。同上京區田中大堰町中井梅子。同聖護院町恒河京八同聖恒村常子。同東京市太田すゑ子。京都府興謝郡石川村蔀原德治　京都百萬遍内高橋たか。京都府紀伊郡下島羽村中島常念寺柴田千代子。同久世郡佐山村淨安寺信ヶ原真哉。大坂府三島郡豐川村粟生法蔵寺藤居念常。同三島郡新田村中野廣太郎。同郡豐川村小野原笹川市兵衛。同稻野德太郎。同稻野彌一郎。同稻野きと子。同稻野なみ子。同郡春日村辻田たか子。同郡阿武野字氷室吉田奈良松。大坂市北區南同心町中辻もと子。同南區櫻川町四丁目音川稀嗣。同西區京町堀一丁目大谷通子。兵庫縣氷上郡船城村樹源寺豐島良成。同川邊郡小西村小花觀音鈴木憲榮。同郡中谷村上野安藝守藤原貫瑛。

茨城生田町二ノ四〇關浦まさ子。同關浦いと子　愛知縣碧海郡旭村字平七山中律）同山中幸雄。名古屋市東區筒井町雄中寺内富澤順念。岐阜縣海津郡高須町圓心寺安田恢順。三重縣三重郡朝日村川崎祐藏。同郡鹽濱村金剛寺山里芳瑞。同中瀬小三郎。同縣桑名町十念寺加藤秀雪。同町光雲寺高井巻成。岐阜縣海津郡城山村河戸行基寺内山田れん子。伊勢四日市五井みさ子。同桑名町矢田町鈴木たけ子。三重縣三重郡朝日村川崎さくの。岐阜縣揖斐郡富秋村井深はる子。

滋賀縣蒲生郡北比郡佐村光明院竹山普及。同甲賀郡三雲村字針四光寺伊藤夢龍。富山縣中新川郡下段村寺井眼次郎。相州小田原谷津城源寺松崎後定。横濱市神奈川町慶運寺笹本戒淨。金澤市鳴坂町妙慶寺大村心定。千葉縣東葛飾郡松戸町三丁目羽生龜太郎。秋田縣南秋田郡土崎港巻導寺細野歡隆。

東京神田區駿河臺鈴町八番地竹内喜太郎。同巻竹内ます子。新潟縣長岡市吳服羽賀虎二郎。同市大工町法藏寺淺井けい子。同市表二ノ町金井すが子。新潟市善導寺吉岡常盤子。同市本町通七番地福島梅子。新潟縣中蒲原郡天神野佐藤とら子。同縣柏崎市極樂寺鶴島順故同町廣小路渡邊八右衛門。

堺市宿院町深井善三郎。伊豫國松山市來迎寺吉川昌堂。

福岡縣若松市旭小路安養寺西山貫道。同市櫛根原太郎。同市藤の木善光寺太田悅道。山口縣仙崎町極樂寺中山法藍。下ノ關市外濱町引接寺前住鷲尾量瑞。奥市辰川通八三ノ一○横田九三太。下ノ關市四南郡町有光萬吉。熊本縣鮑託郡川尻町植野ゆき子。福岡縣朝倉郡甘木町ゐ橋みき子。以上

祖山別時念佛三昧會唱導師　山崎辨榮上人

○辨常は全く羊頭をかゝげて狗肉を賣る俗輩であります。沈默は黃金にして雄辯は銀なりと自ら叫んで行ふこと能はざる、山吹の花であります。永劫の羞を忍んで自警の立札とせむ。

○所感

▲馥郁たる花園に立ちて、更夜涙なき涙にひせび。仰で好日の清透を歎美し、伏して松井の靈泉に、己が淵に小石の沈む如と、にがき返しは慈悲となり救ひを求めむ時來れば、私の雙手で待つて居る放蕩息子を迎ひたる、親の情にいやまさる慈悲の極みの佛に、すがる吾項が幸ぞ。

一生造惡阪りなき、深き罪障赦されて
淨きみ國へ往き生れ、妙なる法のみ衣に
包める我等が親心、榮え〳〵てキラヽカに
無明の暗を照さむと、心に誓ふ樂しさよ。

見よやはるかのあなたには、千億萬里はてもなく
密林鬱々ひろがるを、我等が目指す體現の
林はあすこいざ勇め。

本誌印刷費へ寄附芳名

新潟市善導寺住職　右司會者　吉岡性空
京都府相樂郡木津町正覺寺住職　理事　井上隆森
千葉縣松戸町光明會松戸敎會主任　同　中村禪定

一金壹圓　京都府相樂郡木津町正覺寺　井上隆森殿
一金五圓　東京赤坂區新坂町六三　渡邊信孝殿
一金參圓　三重縣飯南郡柿野町樋山　齋藤妙珠殿
一金壹圓　福岡縣八女郡星野村淨源寺　中川察通殿
一金貳拾貳圓　福岡縣筑手郡新入村長安寺　大谷仙界殿
一金五拾圓　無名氏殿
一金五圓　福岡縣甘木町　石橋みき子殿
一金貳圓　京都東山知恩院勢至堂　中島周典殿
一金拾貳圓　廣島市白島九軒町心行寺　佐々木爲興殿

△正誤　前號第六ページ辨業上人は辨榮上人の誤り
古川哲洲は哲淵の誤り、同第十二ページ奥村辨藏は辨誠の誤り

○精神資糧

心中に神あり自己を見よ。
己れの欲する所神之を欲す、己れの欲せざる所神之を欲せず。
池を掘りて月を待たず、池成らば月自ら來る。
海に至らむと欲せば川に就て下るべし、佛界に至らむと欲せば須く佛道を修すべし。
震が曰く　天知る、地知る、我知る、汝知る、何ぞ知るものなしと云ふや。
善なる道德は眞なる宗敎に依りて美を盡す。
菜根譚に曰く　古の善言を聽くものは之を身に行はんとし、今の善言を聽くものは之を賣らんことを思ふ。
佛恩を思ひ出しても出さずとも呼ばらぬ時も親は離れず。
直なるもまた曲れるも我からの跡恥しき雪の中道。
天地の深き恩みは白糸の一筋なりとあだに使ふな。
白妙の衣の塵は拂ふとも愛きは心の垢なりけり。
差出ゆる鉾先折れよ物毎に已が心を鐵鎚にして。
大空に發て見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。

謹告

○全國各地の讀者諸君へ

本誌發行已來上人に有緣の御寺院や各信者方へ御送りして置きましたが併し御希望なき御方へ月々御送りしても却て御迷惑かとも存じますから本月中に御申込のない方へは本月限り發送を見合せますがら御面倒でも引續き御讀下さる方は本月中に是非御申込下さる樣特に御願申上ます。（編輯部）

○誌料（一ヶ年前金五錢　郵稅共　金六拾錢
（一部前金郵稅五厘
○廣告料（五號活字廿四字詰一行前金五拾錢
（半頁金五圓　一頁金拾圓）前納ノ事）
大正九年三月十五日印刷　發行（毎月一回發行）
編輯兼發行人　東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地　中村禪定
印刷人　千葉縣東葛飾郡松戸町二丁目　秋塲熊太郎
發行所　光明會松戸敎會所　振替東京四九三四八番